

12月10日オープンミーティングの報告

●2022.12.10.(土) 15:00-16:30

●zoom

●参加費 無料

●発表者

大矢莉代 公立中学校教諭

井倉幸起 公立中学校養護教諭

●【内容】「セクシュアリティ教育と哲学対話」

公立中学校でセクシュアリティ教育に取り組んでいる。一方的な講義形式の授業ではなく、生徒と共に教師も考える場にするために、哲学対話を行うことにした。担任だけでなく全ての先生に哲学対話の体験をしてもらい、理解を得ることから始めている。その取り組みをお話しします。

参加者 一般参加8名、運営委員5名 計13名

発表

令和3年度から実践してきたセクシュアリティ教育における哲学対話について

「性教育」ではなく「セクシュアリティ教育」なのか。

広い意味での性教育をしたいので、セクシュアリティ教育としている。

ユネスコの「セクシュアリティ教育」ガイダンスの紹介。

いつもいる教師がかかわった方が大事。セクシュアリティについて生徒が教師と安心して話せる関係性を構築することが大切。問題が起きてからの対応ではなく、全体に対する事前の教育が必要。

根幹は人権教育

令和2年度の中2の授業の失敗が契機となる。

哲学的対話に注目

その理由：① 知識の教授に偏らないように伝えたい ② 教師の価値観を揺るがしたい

① 主体的に自分事として考える

② 教師は「こうあるべき」という正解を持ちすぎる。しかし、教師も、特にセクシュアリティについては分からないことがあると自覚する

教師と生徒とがお互い理解し合い、共感する、安心できる学校環境

令和3年度へ向けての実際の働きかけ：相談 準備 発信 授業計画

県教委に「もぞもぞ哲学対話プロジェクトーもぞてつ」というプロジェクト名で助成金の申請をした。

令和3年度人権「セクシュアリティ教育」の流れの紹介

性の多様性についての研修（6月）

セクシュアリティをテーマとした哲学対話の体験の研修：テーマ「なぜ性的なことは恥ずかしいのか？」（夏休み）

主体的、対話的な授業（哲学対話）の実践へ向けての研修（11月）

ミニ研修

主体的、対話的な授業（哲学対話）の実践：テーマ「なぜ人は気をつかうのか」

座談会：「哲学対話を終えて」

「デートDV」を知る授業の実践

成果と課題

- ・ 哲学対話のよさを生徒も教師も味わうことが出来た。
- ・ 生徒の感想からは哲学対話の効果を実感できた。
- ・ セクシュアリティ教育との関連性に気づいていない教師が多かった。
- ・ 生徒も教師も、哲学対話を深められるよう実践の継続が必要。

今年度の実践

6月 哲学対話：テーマ「みんな違ってみんないいは本当か？」

7月 授業：テーマ「自分の性（SOGIE）について考える」

8月 哲学対話体験研修：テーマ「生きる力とは何か？」「なぜ人は認められたいのか」

11月 問いをつくる研修

3学期 学年ごとに哲学対話

現時点での成果と課題

- ・ 哲学対話を行うことで課題に対して主体的で深い学びにつながる。
- ・ 50分授業でもクラスを半分になれば哲学対話の実践は可能。
- ・ セクシュアリティや人権課題など教師の価値観を押し付けず、対等に一緒に考える課題に効果がある。
- ・ 短時間でも事前にプレ哲学対話が必要。
- ・ 哲学対話後の教師のフォローアップ。
- ・ 長期的な取り組みや個人が授業や学級経営に落とし込むには、問いの作り方が重要になる。

Q/C&A

Q/C：何を教えるかではなくて、対話を通して、学んで欲しいこと、触れて欲しいこと、考えて欲しいこと、が大切だと思うので、そこに行き着くまでの教師の問いかけというのが、発問ではなくて、つまり「こういうことを考えましょう」ということではなくて、「これはどうなのかなー」、「こういう意見が出たけど、どう思う」というような形でファシリをするのがキーなのかなと思う。しかし、実際はこれが難しい。何か工夫されていることはありますか。

A：現在の職場の先生方は、今の質問のようなところまで、達していないかなと思う。ただ、マインド的には教え込むというよりも、聞くということが大事なんだという風になっているのではないかと思う。哲学対話で大事だと思うことは、聞くことに集中する。意見が活発だと哲学対話をしていると思っている先生がいる。しかし、意見が活発だということは必ずしも対話は深まっていない。対話が深まるためには、聞くことが大切で、子どもたちにも必ずしも話さなくてもいいし、考えることが大事だということを伝えている。よく聞いていたら、対話は深まると思う。ちゃんと聞いて、何でとか、本当にそうなのとか言える環境が大事だと思う。

C：セクシュアリティ教育と哲学対話がマッチすると思った。

Q/C：対話が深まるというのはどういうことか。子どもがしゃべっていたらいいというのは、教師が楽だから。家族の話などは非常に盛り上がるので、家族は扱いやすいテーマであるが、もう一歩進むにはどうしたらいいか、いつも悩むところである。聞くのが一番大事と子どもに伝えるが、子どもからは聞くのは聞いているだけ、次はどうしたらいいと言われる。その場合には、質問をするように聞いて欲しいと伝える。例えば、学級開きの時に、英語の 5W1H をプリントして子どもに配っている。子どもにはこのことばを使うと質問しやすいですよ、と伝えている。あるいは、この質問をしようとして聴いて欲しいと伝える。すると子どもは次第に 5W1H が使えるようになっていく。そうして議論が深まっていく場合がある。このような場合は、子どもが対話を深めてくれる。例えば、p4cHI の Good Thinker's Tool-kits の WRAITEC¹のように、子どもに聞き方の具体例を出してあげるのが有効だと思う。

C：p4cHI の Good Thinker's Tool-kits の WRAITEC は当たり前の自分の考えを吟味していく道具となっている。

C：日本語の「きく」には二つの意味、つまり、一つは hear/listen to の意味と、もう一つは ask の意味があって、これは非常に面白いと思う。5W1H などの疑問詞を使うのは、日本語では、ask の意味での聞く（訊く）、つまり「尋ねる」こと。どのように聴くかという

¹ <http://p4chawaii.org/wp-content/uploads/PI-Good-Thinker%E2%80%99s-Tool-Kit-2.0.pdf>

ことは、どのように尋ねるかということ。ハワイの場合は WRAITEC を日常的に使えるような訓練をしているので、先生方もそのような訓練をされてはいかがか。

Q：セクシュアリティ教育において、対話は発達段階に応じてどう変化するのか。

A：例えば、小学生の時に、セクシュアリティと言っても、性の問題というよりも、家族のあり方も一つのセクシュアリティだと思う。家族の中で、父と母がいて子がいるというような、固定概念があると、対話は深めることは難しいが、何でそうなっているのと、教師側が言えたら、そこから話が深まっていくと考えられるが、家族は世界で一番大事だよとか、母は子どものことを大切に思っているよとかいう大人の価値観を言ってしまうと、子どもたちはそうでなければいけない、それが正解だと思ってしまうと思う。こういう考えで生きていくと、大人になったときいつか結婚しなければいけないとか、女の人が家事をしなければいけないとかいうように、選択肢が狭まっていってしまう。小学生の場合であれば、教師が思っている家族像ではなくて、こんな家族があってもいいし、こんな風になりたいと思う女性がいてもいいという形で、質問する教師の側が色々な引出しを持っていて、色々な価値観を受けとめる姿勢がないといけないのではないか。中学生の場合、例えば、デート DV とか、避妊とかの場合、本当に相手のことを大切に思うとはどういうことなのか、なぜ人は気をつかうのかというようなテーマで対話を行った。

Q：教師も、性あるいはセクシュアリティに関しては、非常の大きなバイアスを持っていると思う。自分も無意識のうちで、そのようなバイアスを自分の振舞いの中で示しているのではないか。哲学対話の場合、教師が自分のバイアスを恐れずに、むしろ、子どもたちに吟味してもらうではないけど、何か、どう言っているのか、セクシュアリティによって、哲学対話が切り崩されているというか、そんな印象を持った。教師も自分の思っていることを括弧付きで言えるようなことも、研修の場であるといいなっていました。セクシュアリティと哲学対話をミックスさせるということは、哲学対話のあり方自体も切り崩していく、変えていくという力があるような気がする。自分の性（生）と密接にかかわっているので、自分の思っていることをそのまま語れるということが、すごく大事になっている、そこを大事にしていくと、対話の深め方というのが、全然違う角度から見つかるんじゃないかなと思うので、下手な方法論に取り組まなくても、先生方がやっていきたいことを丁寧にやっていけば、WRAITEC とはまた違う哲学対話の深め方に先生方が気付いていくのではないかなとも思う。

A：哲学対話の一番すごいなと思うところは、その場では全員が対等であることであって、性に関することであっても、生き方や人生に関しても、教師が間違っている可能性はあると思う。子どもたちが、「えっ、それってなんでなん？」「それって、ほんと、おかしいやん」と言った時に、「ほんまやなー」と言って返せる先生ならば、きっと対話は深まっていくと思う。哲学対話は答えを知っている人はいるわけではないので、例えば、同じ状況でも幸せに感じる人もいれば、そうでない人もいる、ということと言える安心できる場、哲学対話の場であれば、ハウツーは要らないということかもしれない。先ほどの発言の意

味はこのように受取ることができるのではないか。

A：性については大人が一番難しいと感じていると思っている。そこで、職員研修で「性的なことはなぜ恥ずかしいのか」という問いで哲学対話をした。やはりその対話では、表面的な意見を持っている人がいないわけではないという感じだった。日常的に生徒と関わるのは先生なわけで、先生がこのような形で関わることで、少しだけでも視点が広まればいいなと思った。個々の先生方の受け止め方はそれぞれであるとは思うが、全体でやることが大切だと思っている。

Q/C：学校の教師の雰囲気によっては、やはり、哲学対話を導入することは難しいのではないかと思う。

Q/C：対話を深めるということが語られていたが、深めるという言葉自体がすごく深いなと思う。どういう状態であれば、深まったと言えるのか。予想のつかない展開に気がつく、学ぶべき点があると思ったりする。哲学対話の中で、セクシュアリティの話題を取り上げる以前に、対話ができる、質問ができる、深める、聞くということができていくと、一個人通しの話も、すっと入るし、受け止められるし、力になれるのかなと思う。そういう関りをつなげていくことができるのかなと思うと、そのような繋がりへの橋渡しをしたい。

A：哲学対話でセクシュアリティ教育をすることで、教師としての思い込み、構えから解放されて、子どもと共に考える姿勢ができて、今では、返って気持ちが軽くなっている。